

選定理由 現存産地が県内に1箇所しかなく、危機的状況にあると考えられる。

形態 原記載は Deshayes (1855: 330, no. 58, as *Chaena grandis*) で、タイプ標本と目される Cuming 標本は Sowerby II (1876b: sp. 3, pl. 1, fig. 3a-c, as *Fistulana grandis*) に図示された。*Chaena tessellata* Gray, 1858: 247-248, Mollusca pl. 39, fig. 5 及び *Vermetus ebaranus* Yokoyama, 1927a: 414, pl. 46, figs 15-17 (Is. Taki & Oyama, 1954: 9, pl. 43, figs 15-17, as “*V.*” *ebaranus* と Oyama, 1973: 117, pl. 20, figs 17-19) にも転載) は新参異名。一方、Dunker (1882: 171-172, pl. 14, figs 10-11), Y. Hirase (1907e: 19, no. 723), 岩川 (1916: app. 22-21, no. 666; 1919: 314) が記録した「*Gastrochaena grandis* Desh.」は本種でなく *G. cuneiformis* Spengler, 1783 ツクエガイである。殻長約 40 mm, 殻高約 10 mm, 前後に細長い矩形で薄い。殻頂は前方に寄って稜角をなし、その前方に放射条を数本走らせる。前端から腹縁にかけて大きく開き、腹縁前方は彎曲する。殻表は白色で、彫刻は弱い成長脈のみ。靱帯は後位で外在、鉸歯はない。内面の閉殻筋痕は小さく、套線彎入は鋭角で深い。生貝は著しく細長い棍棒状の棲管を形成してその中に棲む。棲管は長さ 100 mm, 直径 20 mm を超え、石灰質で表面に多数の砂粒や礫を付着させ、後方へ向けて狭まるため全体観ではフラスコ形を呈し、前端は丸く閉じ、中ほどの内部は隔壁を生じて楕円形に狭められ、後端は開口する。生時は垂直に底質へ埋入し、後端を真上に向けて水管の先端を覗かせる。軟体の解剖学的特徴は Fischer (1866: 321-335, pl. 12, figs 1-8; pl. 13, figs 1-5, as *Fistulana grandis*) に詳述され、水管が著しく長く棲管のほぼ半分の長さを占め、水管の基部には牽引筋が発達する。足は著しく退化的で前方に痕跡状に残るのみ。

写真： 備中〔浅口市〕寄島，1956年1月23日，畠田和一コレクション #4336，福田撮影。管長 24.2 mm，管径 9.1 mm。



分布 タイプ産地は「Philippines, Zebu」(フィリピンのセブ島)で、異名である *Chaena tessellata* も「Philippines」から記載された。*Vermetus ebaranus* は「Shinagawa」(東京都港区品川，後期更新世東京層)の化石で、記載者横山又次郎は棲管を Vermetidae ムカデガイ科(ヘビガイ類)の殻と見誤ってしまった。日本初の本種の詳細な報告は Iw. Taki (1943: 115-117, 118, figs 3-6, 8-14, as *Gastrochaena grandis*) が「Onomiti Channel」(広島県尾道水道)産個体について行い、同時に和歌山県田辺湾と沖縄島羽地内海にも産すると述べた。黒田他 (1971: 710 (和文), 467-468 (英文), pl. 102, figs 16-18) は北限を房総・能登半島とし、石川県珠洲市では化石の産出が知られている (Matsuura, 1977: 158, no. 447, pl. 10, figs 3-4)。国外は中国広東省～広西壮族自治区 (Xu, 2004: 319-320, pl. 174, fig. B; 楊他, 2013: 238, 239, fig. 907), 台湾 (Kuroda, 1941: 172, no. 1442-a, as *G. mumia*, 棲管の化石), ニューカレドニア (Fischer, 1866) から知られ、タイプ産地のフィリピンでは近年もレイテ島産個体が図示されている (Poppe, 2011: 178, pl. 1084, fig. 1)。

生息状況 波穏やかながらも海水の交換が適度にあつて、水質・底質ともに富栄養化・還元化せず清浄に保たれた内湾湾口や島嶼間の海峡周辺の潮下帯(水深約 60 m まで)砂泥底に棲息するが、現在の日本では兵庫県淡路島由良湾・広島県呉市倉橋町・沖縄県羽地内海などごく一部の場所を除き生貝は確認されていない(木村昭・久保, 2012: 153, text-figs a-f; 濱村 2022: 351; 成ヶ島探見の会, 2023: 28, no. 916, fig. 153C)。棲管とその破片は各地の浚渫砂泥中などに時折見かけるものの、多くは中に殻も残されておらず、有史以前の化石が多くを占めている可能性もある。瀬戸内海ではそもそも、Iw. Taki (1943) の発端の報告からして浚渫砂泥からの採集品に基づいていたため「All specimens, of course, are dead」(もちろん全個体が死殻)とあり、生貝を確認したとは文中のどこにも書かれていない。その後も生貝の報告は一切なされなかったため、稲葉 (1982: 66-67, no. 314) の時点で既に「extinct?」(絶滅か?)と疑われていた。近年の広島県芸南地方でも生貝は呉市の1箇所確認されているのみである(濱村, 2022)。最近の他の海域では唯一、成ヶ島探見の会 (2023) が「由良湾では、特に佐毘沖水深 5-8 m の泥底に多く生息しているものと思われる」として生貝の画像を公表しており、その附近には個体群がまだ安定的に維持されているとみられるが、これはむしろ例外的で、全国的にみるとはや本種は明らかに絶滅寸前と考えられる。岡山県では畠田和一コレクションに「備中〔浅口市〕寄島」(1956.1.23. 黒田〔徳米〕氏同定、棲管1個、#4336; 写真)が現存するものの、この棲管も途中で破損して前半部分だけが残り、殻はない。つまり本県では畠田和一の存命中ですら生貝や新鮮な死殻が見出されていなかったことになる。今世紀に入ってからには棲管の破片も得られないままであったが、2023年6月、国土交通省中国地方整備局の調査によって倉敷市味野湾の水深 19.7 及び 31.7 m (ともに細砂混じりシルト底)から複数の生きた幼貝が発見され (OKCAB M31130, 31153), 岡山県内にも幸うじて生存していると判明した。本種はその棲息環境の条件から類推して恐らく水質汚濁に弱く、瀬戸内海では早い時期に衰退に向かったものと考えられる。また、高度経済成長期の過剰な海底浚渫が多くの個体群を消滅させた可能性が高い。現在の岡山県では味野湾からごく少数の生貝が確認されたのみで、小規模な個体群が局所的にしか存在しないとみられるため、今後の存続が危ぶまれる。

(福田 宏)

引用文献追加

濱村陽一 2022 (Mar.). コツツガイ. In 生物多様性広島戦略推進会議 希少生物分科会 (編), 広島県の絶滅のおそれのある野生生物 (第4版) —レッドデータブックひろしま 2021—, 331, 351. 広島県 (環境県民局自然環境課), 広島.

<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/tayousei/j-j2-reddata2-index3.html>

成ヶ島探見の会 2023 (Sept.). 由良湾・成ヶ島の貝類 (2022 改訂版). 成ヶ島探見の会, 洲本.